

# 史料としての回想録——枢機卿の叙述をめぐって——

嶋 中 博 章

## 一 起こらなかった事件の記述

まずは、フロンドの乱（一六四八—一六五三）のある逸話を語った次の史料をお読みいただきたい。

：：彼（コンデ親王）は私がオルレアン公に悪口を言ったと思ひ込んでいた。これが真実でないことは、あなたが先に見た通りです。それから彼はまた、私がパリで彼の評判を落とすようなことをしていると信じていた。これは間違いでなかった。その理由は、すでにお話ししました。彼は、私がまったく身の安全に注意を払っていないことに気づいていた。そしてまた、私が少々気取って、慣例に従い、お忍び視察を口実にして、騒

然たる民衆の只中にしばしば入って行き、彼らの善意に身の安全を委ね、信頼を寄せているのを示していたことも、彼は知っていた。そこで彼は抜け目なく、こうした事情を利用し、今世紀に誰一人として思いつかなかったであろう実に賢く美事な行動に打って出ようとした。パリ市庁舎での会合の日の朝に、民衆を扇動し、十時頃真つ直ぐ私の住居に向かわせようとしたのだ。：：彼の計画では、それから私を丁重な仕方で馬車に乗せ、パリのはずれに連れて行き、市門のところまで二度とパリに入らないことを正式に誓わせるはずだった。：：為されるがまま不意を突かれて、私の評判はすっかり地に落ちていただろう。正直に告白するが、私は軽率無鉄砲にも、こうした事態が起こるなど

とは露ほども考えていなかった。しかし運命は、この美事な計画を親王殿下が遂行することを妨げ、慄然とするような結果をもたらした。もつとも卑劣な陰謀がそこに働いていたのだろう。<sup>1)</sup>

ここに引いたのは、傑作として誉れ高い、レ枢機卿 Cardinal de Retz (一六一三—一六七九) の回想録の一節である。コンデ親王 Prince de Conde (一六一一—一六八六) によるレ枢機卿の拉致計画が、実に劇的に描かれている。レ枢機卿がこの計画の詳細を最初に知ったのは、「だいたい経ってから、親王殿下本人の口からだった。彼は事件から三、四年後に、ブリュッセルでそれを話したのだった<sup>2)</sup>」。計画が立てられたのが一六五二年の夏だから、一六五五年前後のことになる<sup>3)</sup>。その当時、彼ら二人は共にフロンドに敗れ、亡命生活を送っていた。かつての加害者と被害者が、亡命という苦境の中で過去の軋轢を水に流し、昔話に花を咲かせたのだろう。その情景は美しい。

しかし、このような会話がなされたかどうかは、実のところよくわからない。二人がブリュッセルで会ったのは確かかなようだが、拉致未遂事件に関して話があったことを示

す史料は、今のところこの記述しかない。さらに言えば、そもそも拉致計画そのものがあったかどうかさえ、この史料の他に証言はなく、その存在を確認できない<sup>4)</sup>。

私が本論考で行おうとしているのは、この拉致計画が実際に立てられたことを証明することも、また逆に、この計画が存在しなかったことを立証することもできない。私の視線は、出来事そのものよりも、レ枢機卿がこの出来事について書いている時点に向けられる。レ枢機卿にとってこの出来事を書くことの意味、あるいは執筆の際の戦略とその時代的背景、さらには書かれたものが私たち読者に伝えること、これらが本稿の問題系を成す。そしてそれらの問いに答えることを通じて、史料として回想録を読むことの可能性について考えてみたい。

## 二 レ枢機卿とその回想録

### (一) 回想録作者レ枢機卿

レ枢機卿こと、ジャン・フランソワ・ポール・ド・ゴンディ Jean-François-Paul de Gondy は、フィレンツェ出自の有力貴族の三男として生れた<sup>5)</sup>。一六四三年からパリ大司教

であった叔父の下で大司教補 Coadjutor を務め、フロンドの乱只中の一六五二年二月に枢機卿の地位を得ている。

ところで現在、フロンドを、国政改革を求めめる運動と党派間の対立という、ふたつの別個の動きが合わさつたものと捉える解釈が提示されているが、レ枢機卿はこれらふたつの動き双方に関係した。前者に関しては、一六四九年一月から、病の叔父に代つて改革派の牙城パリ高等法院に名誉評定官として臨席した。後者、党派間の対立に関しては、当時の主要なふたつの党派、マザラン派とコンデ派とも別の、オルレアン公ガストンを中心とした第三の党派を作ろうと画策し、内乱の主導権争いに加わつた。

ただし、フロンドに際してのレ枢機卿の政治的立場をあまり図式的に表すことは危険である。日々変動する政局に依りて、彼の動向もまた揺れ動くからである。ある時はマザラン追放を声高に訴えてコンデ派に近寄つたり、そうかと思えば今度はコンデ親王の孤立を提案してマザランと取り引きしたりした。いずれにせよはつきりしているのは、レ枢機卿の目論見は最終的に挫折し、事実上マザランの勝利としてフロンドの幕が下りたことである。その結果は、当然レ枢機卿にとつて厳しいものとなつた。

レ枢機卿を危険人物と見たマザランは、一六五二年二月に彼を逮捕させた。一旦ヴァンセンヌに投獄された後、翌年にはナントの牢獄へ送られる。そこで監視の眼をかくぐつて脱獄に成功するもの（一六五四年八月）、以後七年余りの歲月、イタリアや低地地方などで亡命生活を送らねばならなかつた。帰国が許されるのは、マザランの死後一年ほど経つた一六六二年二月のことである。帰国後は、教皇選挙のためにローマに赴く他は、多くの時をロレーヌ地方の町コメルシー Commercy で過した。そしてそこで、フランス文学史上名高い、回想録を執筆することになるのである。

レ枢機卿が回想録を執筆した具体的な時期については、一六七五年から七七年にかけてとの説に落ち着いている。しかし、最初の刊行本が現れるのは、一七一七年、作者の死後のことで、『レ枢機卿殿の回想録』と題されていた。出版地は国境外のナンシーとアムステルダムになつている。つまり『レ枢機卿殿の回想録』は、地下出版物としてフランス国内に出回つたのだつた。

この地下出版という冒険は大成功だつた。同じ年の暮れには、早くも別の版が出されている。さらに翌年には、五

つの版が出されており、そのうちいくつかは、出版地を外国と装った国内の印刷物だった。その後も人気は続き、一八世紀だけで一二種の版を数え、一九世紀に入ってから一八六六年までに八種が出されている。その後、未刊原稿や種々の異本を参照した「フランスの大作家」叢書版（一八七〇年）が刊行されてからは、これが百年近くの間、後続版の原本として機能し続ける。そして今日では、この「大作家」叢書版を参照しつつ、改めて手稿や数種の手写本などをもとにテクスト批評を行った「プレイヤード」叢書版をはじめ、数種類の版が流通している。（なお、本稿では、とくに断りが無い限り、引用その他は、一九八四年刊の「プレイヤード」版を使用する。）

このように、レ枢機卿の回想録は、その初版より今日に至るまで、多くの読者を獲得し、連続と読み継がれてきた。そしてその過程で、「回想録」という文学ジャンルを代表する傑作との評価を得て、数多くの研究書や論文といった副産物を生み出すことにもなった。ところが、こうした「文学」の愛好者や研究者たちの高い評価がある一方で、レ枢機卿の回想録に激しい非難をぶつける人々も存在した。それは歴史家である。

(二) レ枢機卿の誠実さと真実

レ枢機卿は回想録の書き出し部分で、読者に向かい、次のように宣言している。

これから私は、ただひたすら誠実 *sincérité* だけを宗としてお話しします。あなたに対する尊敬の念がそうさせるのです。この作品に私の名を冠したのは、どんなことに関しても、決して真実 *vérité* を目減りしたり水増ししたりしないためです。

「誠実」に「真実」のみを語るというこの宣言にもかかわらず、レ枢機卿の回想録は、長い間、歴史的史料としての価値を認められてこなかった。その理由は、大きく分けて、三つあるように思う。

第一に主観性の強さ。レ枢機卿の語りには、頻繁に第一人称の「私」が姿を現す。そしてこの「私」が軸となつて物語が展開するだけでなく、ときに前面に出てきて、過去の事件や行為について論評を行ったり、分析を加えたりする。マリイテレーズ・ヒップがしを指して「エゴティスムの王者 *prince de l'égotisme*」と呼んだのは、こうした事

情による。

第二の理由は対話性である。レ枢機卿は明らかに特定の読者を想定して回想録を執筆した。これまでの引用にもしばしば現れた「あなた vous」がそれを証明している。この「あなた」が漠然と読者一般を指しているのではないことは、回想録冒頭の次の一節からわかる。曰く、「マダム、私の人生の物語をあなたにお聞かせすることに、なにかしら躊躇いを感じます云々」<sup>(18)</sup>。この「マダム」が誰を指すのかについては断定はできないものの、現在では書簡集で有名なセヴィニエ夫人との見解が広く受け入れられている<sup>(19)</sup>。とにかく、実際の受け手が誰であれ、レ枢機卿が親しい対話者を楽しませるため、脚色を施しつつ「人生の物語」を語っている可能性があることには留意しなくてはならない。

第三の理由は、誤りと嘘の多さである。研究者のほとんどが指摘していることだが、レ枢機卿の記述には日付その他に誤りが見られ、いくつかの出来事に関しては、完全な作り話であることが判明している。ユベール・カリエの研究によれば、レ枢機卿の虚言は、都合の悪いことの沈黙、自分の役割の誇張（しばしば作り話に結びつく）、よく練られた嘘の三つに分類できると言う<sup>(20)</sup>。いずれにせよ、先ほ

どのレ枢機卿の宣言は、それ自体が嘘と呼ばれても仕方がないくらいに、信用できなさそうである。

では、レ枢機卿の回想録は、過去の真実とはまったく無関係な、純粹に架空の世界に属するものと見なされているのだろうか。ユベール・カリエは、歴史と文学では真実の意味が違ふと考え、レ枢機卿を文学側の住人とする<sup>(21)</sup>ことで、彼の作品にも真実が含まれていると主張した。カリエによれば、歴史における真実とはとりもなおさず正確さであり、歴史家は公平な立場から客観的な記述をする義務がある。これに対し、文学における真実とは、作者が心に感じたことと書かれたことが一致していることであり、作者の主観が前面に押し出されたレ枢機卿の回想録も、その意味では真実を含んでいることになる。さらに、レ枢機卿の優れた点は、歴史の真実を欠いているにもかかわらず、過去を巧みに再現していることだと、カリエは言う。レ枢機卿の作品には、客観的な「細部の真実」は欠けているかもしれないが、他の誰よりも、他のどんな史料よりも、フロンドという時代の雰囲気、つまり「全体としての真実」をよりよく伝えていると言うのである。

これに対し、アンドレ・ベルティエールは、「全体とし

ての「真実」が「細部の真実」の欠如を補っていることなど、どうやったら証明できるのだろうか、と厳しい疑問をぶつける。彼には、カリエの議論が倫理的価値判断を審美的価値判断に置き換えることで、過去の真実という問題を避けているように映った。<sup>23</sup>ベルティエールは、「不可避の嘘」という視点で、レ枢機卿の嘘について考察している。「一六五一年から五二年にかけての出来事に関する話が間違っているのは、彼が都合の悪い真実を意識的に隠しているからと言うより、むしろ、もつれにもつれ矛盾さえしている体験に、現在時から振り返って、連続性と一貫性を与えようとしているからである」<sup>24</sup>。

自己の体験を説明しようとする行為が、過去の真実に歪みをもたらず。こうした見解から得られる結論はこうなる。すなわち、「歴史学の用語で言う真偽を越えて、レ枢機卿の回想録は別種の真実を提供する。作者の内部世界の投影がそれである。その世界は、語られることによつて明確になり、形を持つに至る」<sup>25</sup>。

カリエ批判を行ったベルティエールも、結局は同じ結論に至る。両者にとつて「真実」とは、作者が心に思い描くことがそのまま記述されていることに他ならない。そして

その意味でレ枢機卿は「誠実」なのである。<sup>26</sup>

しかし、歴史研究の立場から、彼らの意見をそのまま支持するのは難しいだろう。彼らの議論は、結局レ枢機卿個人と彼の生産したテキストの内部に止まっている。私たちはむしろ、カルロ・ギンズブルグの次の言葉に親しみを覚えるに違いない。「現実をテキストとして研究せよという流行の命令は、どのようなテキストもテキスト外的な現実への参照なくしては理解されえないという自覚によつて補完されるのでなくてはならない。／したがって、わたしたちは実証主義を拒絶する場合でも、なお「現実」とか「証拠」とか「真実」といった概念には立ち向かわねばならないのである」<sup>27</sup>。

では、私たちには、レ枢機卿の回想録を通じて、テキスト外的な現実に至る道が拓けているのだろうか。この問題を考えるため、再び本論冒頭に挙げた、拉致未遂の話に戻ることにしよう。

### 三 パリ市庁舎の虐殺（一六五二年七月四日）

レ枢機卿の拉致計画は成功しなかった。立案者のコンデ

親王自身から聞いた話として、レ枢機卿はその理由を以下のように語っている。

ドーフィーヌ又広場付近で騒ぎが起こっていた。通行人が皆、藁束を帽子に挿すよう強要されていたのだ。そのとき、高等法院評定官で親王殿下の熱心な支持者キュモンが、そこを通りがかった。彼も皆と同じようにするよう強いられた。彼は大急ぎでリュクサンブール宮に行き、ムツシュー「オルレアン公」に事態を報告し、親王殿下（彼はそのとき回廊にいた）がこうした騒擾の中、外出するのを思い止まるようにして欲しいと頼んだ。キュモンはムツシューにこう話した。「この騒擾は明らかにマザラン派の連中かレ枢機卿が、親王殿下を亡き者にしようとして起こしたものです」。ムツシューは急いで親王殿下の後を追った。親王殿下は小さな階段を下りて行くところだった。馬車に乗って私の住居に行き、「拉致」計画を実行しようとしていたのだ。ムツシューは権限によって、さらに腕づくで、彼を引き止め、自分と昼食を摂らせ、それから市庁舎へ彼を伴わせた。市庁舎では、先ほど述べたよう

に、会合が開かれていた。彼らは一同に感謝の意を表し、マザランと戦う方法を考える必要を訴えて、市庁舎を後にした。丁度このとき、国王が派遣した喇叭手がやって来て、会合（の決議）を八日間延長するように求めた。これに対し、グレーヴ広場に集まっていた群衆は激昂し、パリ市は親王たちと同盟を結ぶべきだと叫んだ。親王殿下が朝のうち群衆の中に紛れ込ませていた数名の士官は、待っていた命令を受け取ることもなく、群衆の血氣を利用することもできなかった。群衆の血氣は、もつとも近くにいる対象に向けて爆発した。<sup>(28)</sup>

この暴動は、パリ市庁舎の虐殺として知られる。数多いフロンドの逸話の中でも、もつとも血生臭いもののひとつである。一六五二年七月四日、長い内乱で混乱に陥った首都の秩序をどのように回復するか話し合うため市庁舎に集まった市の役人や有力者に、暴徒と化した群衆が襲いかかった。死者は、反撃によって殺された暴徒も含め、一〇〇名以上を数えた。

この事件については、回想録やパリ市庁の記録簿など、

いくつかの史料が残っている。<sup>(28)</sup>さらにそうした史料をもとに、何人かの歴史家は事件を再現しようと試みている。<sup>(29)</sup>これまでの研究によれば、この事件の首謀者がコンデ親王であつたことは間違いないなさである。親王が七月四日の会合に臨席したのは、都市の有力市民と反乱派大貴族の間で、はっきりとした形で同盟関係を結ぶためだった。ところが会合では、同盟締結に至る明確な返答を受けとることができなかつた。こうした事態をある程度予測していた親王は、民衆蜂起という圧力を用いて同盟を結成しようとする。そのために自分の配下を群衆の中に潜り込ませてもいた。<sup>(30)</sup>

こうした今日一般に認められている見解と比較すると、レ枢機卿の説明はずいぶん違つている。レ枢機卿によれば、コンデ親王の計画は「群衆の血気を利用」して彼を拉致することであり、それが突然の暴動によって頓挫したというのである。市庁舎の襲撃はコンデ親王の目的ではなく、彼の意図とは無関係に起きた事件であつた。そして、その後には「もつとも卑劣な陰謀」があつたとも言つていた。

レ枢機卿とは正反対に、虐殺の責任をコンデ親王に負わせた証言を残しているのが、アカデミー書記のヴァランタ

ン・コンラールである。彼の回想録には、次のようにある。

：：彼〔市の国王検事〕は、国王がマザラン抜きでパリに戻ることを要請し、演説を締めくくつた。その後、親王方は立ち上がったが、その表情は実に不満そうだった。意見を述べる十分な時間がなく、皆がこの国王検事の結論に従うか、あるいは少なくとも、親王方との同盟を決議しないだろうことが見て取れたからだ。多くの人が信じていたように、もしその後起こつたことに彼らが同意していたのなら、あるいは、ある者が断言するように、彼らが命令していたのなら、会合に来る前から、彼らがこの同盟は成立しないだろうと判断していたことは十分あり得る。：：それで市庁舎を出て、グレーヴ広場に面した階段に姿を現したとき、彼らは群衆に向かつてこう言つた。「ここに居る者たちは、われわれのために何も為す気がない。彼らはだからだと事を長引かせ、結論を八日先送りにするつもりだ。そんなのは、マザラン派のすることだ。お前たちのしたいようにするがいい」。この言葉が発せられるや否や、市庁舎の窓に向かつて、何発ものマス



ケツト銃が放たれた。<sup>(32)</sup>

さらに、市庁舎襲撃の実行犯に関しても、レ枢機卿とコンラールの証言は好対照を見せる。レ枢機卿の証言では、「市庁舎に向かつて銃が放たれ、門扉に火がかげられ、武器を手にした者が中に入り、ル・グラ殿・・を殺害した」*Il on tira dans les fenêtres de l'Hôtel de Ville : l'on mit le feu aux portes : l'on entra dedans l'épée à la main, l'on massacra M. Le Gras...*<sup>(33)</sup>と、主語として不定代名詞の「l'on」が繰り返されるだけで、実際に犯行に加わった人物がぼかされている。

一方、コンラールの証言は、「そのとき人々は、民衆とは異なる輩が混じっているのを見た（とくにロピタル元帥がそれに気づいた）。彼らは戦争に精通していた。単なる兵士ではなく、選り抜きの兵士だった。そして、戦争の規則に従って、要塞を攻撃しているかのように行動していた<sup>(34)</sup>」と語り、コンデ親王が群集に紛れ込ませた軍人の役割を強調し、この虐殺が単なる民衆暴動であったことを否定している。

ただし、コンラールの証言だけで、レ枢機卿の証言の信

憑性を否定するのは危険である。ニコラ・シャピラが最近明らかにしたところでは、一九世紀に編集・刊行されたコンラールの回想録は、題名こそ「回想録」であったけれども、「実際は反フロンド派、とりわけ反コンデ派のパンフレット」を寄せ集めたものだった<sup>(35)</sup>。そこで、別の証人も呼んでみよう。次はレ枢機卿の秘書だったギイ・ジョリの回想録の一節である。

この目的のため、彼「コンデ親王」は多くの士官と兵士を町に入れた。彼らは市庁舎の周りに散らばり、民衆の中に紛れ込んだ。・・親王殿下は退出の際に階段の上から言った。会合に参加しているのはマザラン派だけで、事態を長引かせることしか考えていない、と。ほんのわずかな合図が送られるのを待っていた彼の仲間たちは、全員を打ちのめせ、と叫んだ<sup>(36)</sup>。

コンラールの証言では、虐殺の命令を出したのがコンデ親王かオルレアン公かはつきりしなかったが、ジョリは暴動を煽つたのはコンデ親王だったと断言している。秘書が知っていたことを、その主人が知らなかったと誰が信じら

れるだろうか。実際、レ枢機卿は虐殺のひと月程後で、コンデ親王の関与を示唆する内容のパンフレットを書いていたのである。

以上が親王にそれらの決心をさせた理由である。その決心が引き起こした身の毛もよだつ結果が、そのすぐ後、市庁舎の火災とわが町の名だたる市民の殺戮として現れるのをわれわれは見た。彼らの死は、今後何百年もの間、人々の涙を誘うだろう。しかし、その償いは今のところ、親王殿下のつまらない使用人ひとりか罰せられただけだ。その使用人が絞首台の上で、陰謀に加担した者は、同家に三十人以上いたと告白したにもかかわらずに<sup>17</sup>。

ここから明らかなように、市庁舎襲撃へのコンデ親王の関与は、事の真否はともかくとして、当時の人々の間では明白な「事実」として受け止められていた。レ枢機卿として例外ではなく、コンデ親王の責任を十分認識していたのである。それにもかかわらず、彼は回想録を執筆するに際して、親王の責任を免除するような記述をした。その理由は

どこにあるのだろうか。この件に関して、前節で取り上げたふたりの研究者、ユベール・カリエとアンドレ・ベルティエールは、十分には答えてはくれない。カリエはこの記述を、レが自分の政治的重要性を強調するために作り上げた嘘に分類するだけで満足している。ベルティエールは、レの洞察力の鋭さを弁護することに一生懸命になるあまり、この事件の記述を歴史的事件の説明に失敗した例外的な事例として片付けてしまい、なぜレが嘘をついたか追求することを放棄している<sup>18</sup>。

レ枢機卿が嘘の記述をした理由を、回想録執筆当時に彼が置かれていた状況と関連づけて説明しようとするれば、できないこともない。回想録が書かれた一六七〇年代半ば、レ枢機卿とコンデ親王は完全に和解し、友好的な関係を結んでいた。それは、この時期にレ枢機卿がコンデ親王に宛てて書いた書簡の文面から窺うことができる<sup>19</sup>。つまり、レ枢機卿がコンデ親王の虐殺への関与を否定したのは、親王が回想録を目にしたとき、気分を害さないための配慮だったと考えることもできるのである。しかし、そうした説明で満足してしまえば、結局、レ枢機卿の回想録は歴史の証人としての価値を持たないことを認めることになってしま

う。レ枢機卿の回想録は、いつまでも「作り話という意味での」文学」の枠に閉じ込められ、「歴史」とは無縁の状況に置かれ続けることになる。私はその枠組みを乗り越えたい。レ枢機卿に「文学」だけでなく、「歴史」の住民票も与えたいのである。そこで以下では、レ枢機卿がコンデ親王について語った部分を詳しく見ることを通じて、「文学」から「歴史」への通路を探ってみよう。

#### 四 神話的現実描写と叙述戦略

##### (一) コンデ神話

レ枢機卿の回想録には、「肖像の回廊galerie de portraits」と呼ばれる一連の人物描写がある。そこに掲げられたコンデ親王の肖像は、以下の記述で始まる。

親王殿下は軍人として生れた。こんなことは、彼とカエサルとスピノラにしか起こらなかった。彼はカエサルに並び、スピノラを越えた。勇敢さは彼のもつとも目立たない性質のひとつである。<sup>(1)</sup>

ここでは、コンデ親王の軍事的才能が、古代の英雄カエサルや、「ブレダの開城」の名将スピノラになぞらえて賞賛されている。注目すべきは、ここで示された軍事的天才としての像が、現実の出来事の描写にも反映されていることである。次に挙げるのは、一六四八年に北部国境の町ランスLensでの戦いを描いた場面である。

戦闘は敗北寸前だった。親王殿下はそれを立て直し、あなたもご存知の驚のような眼差しの一撃だけで勝利したのだ。その眼差しは、戦争の中ですべてを見抜き、決して眩むことがない。<sup>(2)</sup>

もう一例挙げよう。今度は一六五二年七月二日の名高いフォーブール・サン・タントワヌの戦いを描いた部分である。

…この世でもっとも血生臭く激しい戦闘の後彼「コンデ親王」は軍隊を救った。ほんの一握りの小さな軍隊でしかなかった。テュレンヌによって、そう、ラ・フェルテ元帥殿の軍によって増援されたテュレンヌに

よつて攻撃を受けていたのに<sup>(4)</sup>。

これらの記述からは、現実の出来事を語るレ枢機卿の手法が、歴史の記述とははつきりと区別される、神話や伝説の語り口にきわめて近いことがわかる。比較文学者エーリッヒ・アウエルバツハは『ミメーシス』の中で、歴史の記述を神話・伝説のそれから分ける特徴として、奇跡的要素の繰り返し、物語の滑らかな展開、英雄の行為の単純化を指摘しているが<sup>(4)</sup>、レ枢機卿の語りの中に、そうした神話的・伝説的記述の特徴を見出すことは易しい。たとえば、敵より数の上で劣る味方、敗北を勝利に変える鋭い眼差しなどが、コンデ神話の特徴的な要素と言える。レ枢機卿の記述に見られる神話の特徴をより明確にするため、ボシュエによるコンデ親王の追悼演説と比較してみたい。追悼演説は死者の顕彰を目的とした文学ジャンルで、その内容は事実に基づきながらも、死者を称え、かつ聴衆の心を揺さぶり彼らを教導するため、ふんだんに装飾が施されており、その意味では死者にまつわる一種の伝説作りとも言えるからである<sup>(5)</sup>。以下は、一六四三年のロクロワの戦いについて語った部分である。

本当に敵軍は味方よりも強い。敵軍は練達のワロン人・イタリア人・スペイン人より成り、そのときまで一度たりとも負けたことがなかった。しかし、国家危急との気持ちかわれらの軍隊に鼓吹した勇氣は如何ばかりであつたか。受継がれた勇氣は、若き血統親王がもたらした勇氣は、どれほどのものだったか。：：彼は情熱に駆られて、自己のその情熱を兵士から兵士へと広めて行く。それとほぼ同時に皆が見た。彼が敵の右翼を攻め、動揺したわれらの軍隊を支え、ほとんど打ち負かされて、いたフランス兵たちをひとつに集め、スペイン人を敗走させ、至る所に恐怖をもたらし、攻撃を逃れたい者たちをその輝くばかりの視線で驚かせるのを<sup>(6)</sup>（傍点引用者）。

ここでも、味方より強い敵、敗北しかけた味方、その不利な状況を勝利に変える眼差しといった、コンデ神話の特徴を見て取ることが出来る。ここから、レ枢機卿の回想録に登場するコンデ親王の姿は、ステレオ・タイプ化されたイメージの影響を相当受けていると言つてよいだろう。問題

は、こうした神話がどれほど事実を反映しているかという点にあるのではない。神話が語られる意図にこそ注目する必要がある。ボシユエの場合、死者の顕彰や聴衆の教導といった比較的是つきりとした目的があった。では、レ枢機卿は、どのような意図によつて、コンデ神話を語つたのだろうか。

## (二) レ枢機卿の叙述戦略

歴史家クリスチャン・ジュオーは、レ枢機卿の回想録の特質を次のように述べている。「レの回想録は、政治的自伝でもなければ、思い出の寄せ集めでもない。彼の回想録が間違いや嘘だらけであることは、何度も何度も指摘されてきたが、そんなことは重要ではない。この回想録は政治行動論として捉えねばならない。この回想録の目的は、為されたことを語るといふより、為すべきだったことについての考察、諸々の失敗や可能性の記述なのである」<sup>17)</sup>。

ジュオーのこの指摘が正しいとするなら、レ枢機卿の「政治行動論」が問われなければならない。それが端的に現れていると思われるのが、一六五一年八月二一日のパリ高等法院での騒ぎを記した部分である<sup>18)</sup>。この日、レ枢機卿は高

等法院の広間でコンデ親王と直接論戦を交わした。このとき高等法院にはレとコンデ双方の仲間が武装して集まり、議場は一触即発、いつ流血騒ぎが起きても不思議はない異様な興奮に包まれていた。レ枢機卿とコンデ親王の舌戦が白熱し、彼らを取り巻く仲間たちにもその熱が感染したとき、

部長評定官たちが飛んで来て、親王殿下と私の間に割つて入った。彼らはここが正義の殿堂であること、パリの市の保全を考慮してほしいことを、親王殿下に懇願した。そして彼らは、広間から貴族たちや武装した者たちを退出させるよう請うた。親王殿下はそれを認め、その旨を友人たちに伝えるよう、ラ・ロシュフコー殿に頼みさえした。・・・彼が友人たちを退出させるようラ・ロシュフコー殿に頼んだとき、私は立ち上がり、軽率にもこう言つてしまった。「私も友人たちに引き下がるよう頼みに行こう」<sup>19)</sup>。

ここでレ枢機卿は自分の失敗を率直に認め、自分の振舞いが「軽率」だったと振り返る。そしてその理由を次のよう

に説明する。

下位にある者が、敬うべき相手と言葉の上で対等になることは、決して許されることではない。たとえ、行動の上で対等であるとしても。<sup>30)</sup>

つまり、レ枢機卿の「政治行動論」とは以下のようなものであったと考えることができよう。たとえ相手が王族であろうと、政治行動の面では対等に渡り合うことができる。ただし、それには条件がある。それは、そうした行動面での対等性を口に出してはならないということだ。

この条件を守らなかつたレ枢機卿は、危うく命を落とすところだった。「と言うのも、出入口の二枚扉の間に首を挟まれたからだ。ラ・ロシュフコー殿が閉めたのだった。彼はコリニー殿とリクス殿に私を殺せと叫んでいた<sup>31)</sup>」。加害者であるラ・ロシュフコーも、未遂に終わった殺人の動機を次のように語っている。

親王殿下は躊躇うことなく友人たちを退出させることに決め、ラ・ロシュフコー公に混乱なく彼らを退去さ

せるよう頼んだ。このとき、大司教補が立ち上がった。そして、この機会に皆から親王殿下と対等に扱われようとして、彼も同じことをしようと言ひ、返事も待たずに大広間を出て、友人たちに話に行つた。ラ・ロシュフコー公はこうした振舞いに憤慨して、彼の後ろを八歩から十歩下がってついて行き……<sup>32)</sup>

ここでもレ枢機卿が発話行為において王族と対等になろうとしたことが非難されている点に着目しておこう。

以上から、レ枢機卿の叙述戦略に関して何が言えるだろうか。まず、レ枢機卿は、軍事的英雄という半ばステレオタイプ化されたイメージを繰り返すことで、コンデ親王を神話化して描いた。次いで、高等法院での騒ぎを通じて、レ枢機卿が自分自身をその神話化されたコンデ親王と行動面で対等に渡り合える存在として描いていることに気づくだろう。つまりレ枢機卿は、コンデ親王を神話化し、その神話化された親王と対等に渡り合う自分を描くことで、神話化された親王と同じ水準に自分を引き上げ、今度は自分が主役の新しい神話を作ろうとしたのである。このレ神話の構築こそ、レ枢機卿の叙述戦略に他ならない。

ここでもう一度、拉致未遂事件および市庁舎襲撃事件の記述に戻ろう。あの記述は、これまで述べてきたレ枢機卿の叙述戦略とどのように結びつくだろうか。

そもそも回想録とは、実際の出来事をそのままの形で提示するものではあり得ない。回想録作者は何らかの筋立てに従って、自分の見聞きした過去を再現する。多くの場合、その過程で、作者は自分の物語に一貫性を与えようと試みるが、しばしば実際の出来事には再現されるべき物語にそぐわない部分が含まれることがある。レ枢機卿の場合、物語の筋立てはコンデ親王を通じての自口の神話化だった。そして、市庁舎の虐殺とそれへの親王の関与が、叙述戦略を阻害する現実だったと考えることができる。そして、この現実を前に、レ枢機卿は拉致計画という新しい要素を加えて、自分だけの物語を構築したのだった。

もし、虐殺事件へのコンデ親王の関与をはつきりと述べてしまったら、これまで綴ってきた英雄としてのコンデ親王というイメージは崩れ去ってしまったことだろう。コンデ親王が崩壊してしまえば、それに立脚していた自分自身の神話が成り立たなくなってしまう。そうかと言って、無視してしまうには虐殺へのコンデ親王の関与は広く知られ

すぎていた。だからレ枢機卿は、持ち前の雄弁さを最大限發揮して、拉致計画という真否の判定しがたい挿話を、真実らしく語ったのではないか。

着目すべきは、コンデ親王の虐殺事件への関与を否定しようという態度が、レ枢機卿のみに見られるものではないことである。事件の際、国王と共にサン・ドニにいた王母付きの女官モットヴィル夫人も、回想録の中で次のように語り、コンデ親王を弁護している。

サン・ドニではそのことが知られていなかっただけでなく、誰がそんな蛮行を許したのか分っていませんでしたが、他の誰よりも親王殿下が犯人だと疑われていたのです。しかし、もつと好意的に判断しようとなさる方々は……親王の命令がきちんと伝わらず、誤って解釈されて、彼らが望んだ以上に災いが大きくなったのだと考えたり、彼らの意図は結果が示したほど恐ろしいものでも危険なものでもなかったのだと考えたりしました。皆の意見が一致していたのは、親王殿下がごとのとき、災いが大きくなるのを防ぐために、できる限りのことをしたということです。<sup>53</sup>

コンデ派に悩まされていた母后側の人物がこれほど親王を弁護している点は、注目に値しよう。さらに、先ほど見たコンラールも、親王の責任に言及しながらも、事件当日の暑気に触れ、控えめではあるが、親王の罪を軽減している。<sup>(54)</sup>

それゆえここでは、レ枢機卿が拉致未遂の挿話を持ち出して、コンデ親王を免責した理由を、レ枢機卿の個人的な理由からのみ探るのではなく、より広い視野から考察する必要があると思われる。レ枢機卿の自己顕示欲の強さだけに原因を求め、彼の自己愛の強さを強調するだけでは、不十分なのである。

## 五 演劇的世界観

レ枢機卿の叙述戦略を単に彼個人の気質のみに帰することなく、より広い視野で捉えなければ、彼の叙述を本当に理解したことにはならない。つまり、彼の叙述に直接間接に作用したであろう当時の思想的風土や価値観が問われなくてはならないのである。では、レ枢機卿を取り巻いていた思想的風土とは何か。それを一言で言い表せば、英雄的  
世界観ということになる。より具体的には、コルネイユ

的英雄世界である。

ピエール・コルネイユの政治劇は、一七世紀前半、ルイ一三世の時代に、貴族の間で絶大な支持を得た。舞台上現れる英雄は、当時の貴族にとつて、モラルのモデルとして機能していたとされる。かの『ル・シッド』が初演されたとき（一六三七年頃）、レ枢機卿は二三、二四歳だった。まさにコルネイユ全盛期に青年期を過したことになる。そして実際に、若き日の彼がコルネイユの作品を読んでいたことも知られている。<sup>(55)</sup> たしかに、レ枢機卿が回想録を執筆していた一六七〇年代は、ジャンセニスムに代表される厭世主義的なモラルが浸透し始める時代でもあるが、コルネイユの英雄的モラルは完全に消え去ってしまったわけではなく、むしろ回顧的な羨望を伴いつつ、フロンド世代の貴族を魅了しつづけていた。<sup>(56)</sup>

ところで、コルネイユ的な英雄は、アンヌ・ドートリツシユの摂政期からフロンドにかけての時期に、ひとりの人物に受肉する。それがコンデ親王である。数々の武勲と勝利、高貴な血筋、高い教養、「コンデは英雄のあらゆる条件を、自己の中に集約していた」<sup>(57)</sup>。一六五一年の年頭、コルネイユの新作『ニコメード』が上演されたとき、観客は



舞台上の主人公に、マザランによって逮捕されたばかりのコンデ親王の姿を重ね合わせたという。<sup>(55)</sup>たとえコルネイクが当時の政治状況を直接作品に反映させることはなかったにしても、重視すべきは、『ニコメード』を観た人々が主人公にコンデ親王を重ね合わせた、その想像力の方である。なぜなら、コンデ親王にコルネイクの英雄を認めるその想像力が、レ枢機卿の叙述に密接に関係していると考えられるからである。以下では、一六四九年のある事件の記述からこの点をはつきりさせたい。

一六四九年当時、まだ大司教補と呼ばれていたレは、枢機卿の緋色の帽子を手に入れようと、フロンド派を裏切つて、裏で宰相マザランと取引をしていた。一方のコンデ親王は、未だ王権の側にあり、その赫々たる武勲によって、宮廷内に絶大な影響力を誇っていた。つまり、宰相にとつては、実に煙たい存在だったわけだ。そんな中、事件は起こつた。

二月二一日の夜、コンデ親王の馬車がボン・ヌフで何者かに狙撃された。コンデ親王は乗っていないが、従者のひとりが傷を負った。程なく、ひとりの貴族、熱烈なフロンド派として知られたラ・ブレイ侯marquis de La

Roufféが首謀者として逮捕され、パリ高等法院は「国家に對する陰謀<sup>(56)</sup>」として審議を始める。

事件はその後、思いもよらぬ展開を見せた。二月二二日、高等法院はこの事件に関与したとして、大司教補、ポール公、フロンド派評定官ブルーセルの三人を召喚したのである。彼ら三人がコンデ親王を殺そうと協議していたとの噂があり、ラ・ブレイ侯を大司教補の家で見かけたという情報もあつた。もちろん、レ枢機卿は事件への関与を否定している。よろしい、ラ・ブレイ侯が居たことは認めよう。しかし「私は窓から投げ落とさせると、彼を脅したのだ<sup>(57)</sup>」。さらにレ枢機卿は、自分を弁護するため、マザランの関与を仄めかす。

：あなたに、ラ・ブレイ侯……が枢機卿〔マザラン〕と行動を共にしていたと、私が信じる理由をお話します。……レグ<sup>(58)</sup>は嘘をつかない男でしたが、その彼が死の直前、私に言ったことがあります。枢機卿が亡くなる時、常に忠実に仕えた人物として彼〔ラ・ブレイ侯〕を国王に推挙したということです。しかし、この人物がいつも熱心なフロンド派であつたことを、あ

なたもお認めになるでしょう。<sup>(63)</sup>

もちろん、レ枢機卿のこの話をそのまま信じるわけには  
いかないが、単なる作り話として退けることにも躊躇いを  
感じる。彼の仇敵ラ・ロシュフコーもまた、マザランの関  
与を口に出しているのだ。ラ・ロシュフコーによれば、コン  
デ親王の馬車が狙われたのは、「親王殿下を逮捕しようと  
画策」したマザランが、その「計画をより巧妙に実行」す  
るため、親王とフロンド派を分裂させる目的で仕組んだ罠  
であったと言う。<sup>(64)</sup> 事実、この事件の一カ月後、親王は宰相  
の命令で逮捕された。

だが、私はここで事件の真相を明らかにしたいわけでは  
ない。モットヴィル夫人も言うように、「この陰謀は厚い  
ヴェールにすっぽりと包まれて」いる。<sup>(65)</sup> 注目すべきは、レ  
枢機卿もラ・ロシュフコーも、この事件をマザランの陰謀  
と見なしている点である。たしかに、彼らの態度は、マザ  
ランに対する個人的憎悪で説明できるかもしれない。しか  
し、それだけで彼らの語りを十分に説明したことにはなら  
ないだろう。

ポール・ベニシユーによれば、コルネイユの演劇では、

自尊心の追及が崇高さを生み、主人公を偉大な英雄に仕立  
てるのだが、自尊心が崇高さを帯びるためには、自尊心が  
ただあるだけでは不十分で、そこに「危険、抑圧、不運」<sup>(66)</sup>  
が介入する必要があると言う。つまり、コルネイユ的英雄  
は、多くの場合、何らかの危険に曝される人物として描か  
れている。

では、その危険とは具体的に何を指すのか。その最たる  
ものが、君側の奸の悪意に他ならない。「コルネイユの悲  
劇では、気弱な君主、彼に不正な助言をする大臣、つまり  
宮廷は、悪だくみと裏切りが渦巻く場」として表現される。  
先ほど取り上げたレ枢機卿とラ・ロシュフコーの語りが、  
こうしたコルネイユの演劇世界の敷き写しであることに気  
づくだろう。腹黒い大臣マザランが、英雄コンデ親王を「悪  
だくみと裏切り」によつて暗殺あるいは逮捕しようとした、  
というわけである。この物語の構造は、レ枢機卿の拉致計  
画とそれに関連して語られる市庁舎の虐殺をめぐる叙述で  
も確認できる。本稿の冒頭で引用した一節の最後の件を思  
い出して欲しい。レ枢機卿の拉致という「美事な計画を親  
王殿下が遂行することを妨げた」市庁舎襲撃という「慄然  
とするような」事件の背後で、「もつとも卑劣な陰謀」が

仕組まれていたことを、回想録の作者は仄めかしていた。そこでは犯人の名は明言されていないが、当時の読者が「陰謀」と聞いて真つ先に思い浮かべる黒幕は誰か、もう言わなくてもわかるだろう。したがって、レ枢機卿の語りには、彼の個人的な欲望だけが映し出されているのではない。彼の同時代人が賛同し共感し、そしてもつとも「現実的」と感じるものを見方をも反映しているのだ。コンデ親王にコルネイユ的英雄を見出そうとしたフロンド世代貴族の想像力が、レ枢機卿の叙述には現れているのである。

## 六 おわりに

一六七九年、コンデ親王は、病床に臥すレ枢機卿のもとに家来をひとり遣わした。そして、八月二四日、その家来に宛てて次のような手紙を書いている。

そなたが知らせてくれたレ枢機卿の容体については残念に思う。この手紙を受け取ったとき、もし彼が亡くなっている場合は、レディギエール夫妻(68)にお悔やみの言葉を伝えて欲しい。もしそのようなことにならなけ

れば、彼のもとを離れず、彼が亡くなり次第すぐに知らせて欲しい。とにかく、絶えず彼のことを知らせるように(69)。

かつての政敵は友人となった。ひとりは死の淵に臨み、ひとりはそれを氣遣う。結局、親王の悪い予感的中した。それも皮肉なことに、彼がこの手紙を書いたその日、レ枢機卿は息を引き取ったのだ。彼らふたりのこうした遣り取りを見ると、フロンド自体がひとつの壮大な演劇だったように思えてくる。仲の良い役者が、舞台では敵役を演じ、終演後談笑する。演劇的世界は想像力に止まらず、彼らの実際の生をも支配していたのかもしれない。

この演劇的な生を生きたレ枢機卿が描いた過去は、彼の主観を色濃く反映し、虚構性の強いものとなった。そして彼の優れた叙述力がその虚構性を「文学性」にまで高めることに貢献した。だが、その文学性がかえって仇となり、彼の回想録は信憑性に欠けるものとして長らく歴史家から遠ざけられることにもなった。しかし、その信憑性に欠ける記述にも、狭い意味での歴史的眞実を越えた、別種の歴史的眞実が隠されている。それは、ユベール・カリエの言

う「全体としての真実」、時代の雰囲気という曖昧な段階を越えている。むしろ、批評家ツヴェタン・トドロフの言う「露呈の真実 la vérité-dévoilement」<sup>(6)</sup>にそれは近い。レ枢機卿の回想録は、知識の正確さ(トドロフの言葉では「適合の真実 la vérité-adéquation」)を越えて、フロンドを実際に生きた人々の想像力に直接触れるものである。トドロフが強調しているように、歴史を書きとどめる者は、個々の具体的な知識の収集に満足することなく、歴史的現象の本性を露呈する洞察力の深さが求められる。意識的にそうしたのかはわからないが、レ枢機卿は、コンデ親王に軍事的英雄やコルネイユ的英雄をみとめようとする同時代人の想像力や感受性を見抜き、それをしっかりと受け止めて、物語を紡いでいった。その点で、彼は優れた芸術家であるだけでなく、明晰な歴史の証人でもあるのだ。

### 【註】

- (1) Cardinal de Retz, *Mémoires*, dans *Œuvres*, coll. « Pleiade », éd. par Marie-Thérèse Hipp et Michel Pernot, Paris, 1984, pp. 850-851. [以下「Retz, *Mémoires*」表記]  
(2) *Ibid.*, p. 850.  
(3) 実際に二人がブリュッセルで会ったのは、一六五八年ごろ

とされている。

- (4) プレイヤード版の編者も、次のように述べている。曰く、「コンデが実際にレを拉致しようと企てたことを証明するものは何ひとつない。……たとえ本当にコンデが一六五八年のブリュッセルでレに向かい、彼を拉致しようとしていたと言ったとしても、それが真実であることにはならない。この出来事について確実なことを伝える証言は何もないのである。」Retz, *Mémoires*, p. 1615, note 3 de la page 851.

- (5) コンディ家は、もともとフィレンツェの銀行家で、フランスの分家は、ジャン＝フランソワ＝ポールの曾祖父 Antoine に始まり、早くも彼の代にカトリヌ・ド・メディススの寵を得て、社会的な上昇を果たす。祖父 Albert はフランス元帥やガレー船団長を務め、父の Philippe-Emmanuel もガレー船団長となった。またコンディ家は、聖界でも要職を得る。大叔父 Pierre は、パリ司教となり、一五八七年には枢機卿となる(コンディ枢機卿)。パリ司教の地位は、伯父 Henri に移り、彼もまた枢機卿の地位を得(初代レ枢機卿)。さらに叔父 Jean-François はパリ大司教となった。コンディ一族については、Simone Bertière, *La vie du cardinal de Retz*, Paris, 1990 の第一章を参照。

- (6) Robert Descimon et Christian Jouhaud « La Fronde en mouvement : le développement de la crise politique entre 1648 et 1652 », *XVII<sup>e</sup> siècle*, octobre-décembre 1984, n° 145, pp. 305-322.

- (7) 本来であれば、一六五二年二月以前については、大司教補

と呼ばねばならないが、混乱を避けるため、本稿では引用など一部の例外を除いて、レ枢機卿の呼称を用いる。

- (8) レ枢機卿は生涯に四度教皇選挙に参加している。参加した年と選出された教皇は以下の通り。一六五五年アレクサンデル七世、一六六七年クレメンス九世、一六七〇年クレメンス十世、一六七六年インノケンティウス十一世。

- (9) André Bertière, *Le cardinal de Retz mémorialiste*, Paris, 1977, réimp. 2005, 3 volumes | 題解 | 章を参照。

- (10) *Mémoires de Monsieur le Cardinal de Retz*, 3 tomes, Amsterdam et Nancy, chez J. B. Cusson, 1717. この手稿には「回想録」ではなく「レ枢機卿の生涯 Vie du cardinal de Rais」という題名がつけられていた。

- (11) *Mémoires du Cardinal de Retz*, tome I à V des *Œuvres* du Cardinal de Retz, coll. « Grands Écrivains de la France », éd. par Fellet, Gourdaul et Chantrelauza, Paris, 1870-1880.

- (12) レ枢機卿『回想録』の諸版について、A. Bertière, *op. cit.*, pp. 631-632を参照。

- (13) 「回想録」を明確な「ジャンル」と見なすことにはまだ問題も残るが、ジャンルとしての回想録については、とりおそえち以下の文献を参照。Marc Fumaroli, « Les mémoires du XVII<sup>e</sup> siècle au carrefour des genres en prose », *XVII<sup>e</sup> siècle*, 94-95, 1971, pp. 7-37.

- (14) レ枢機卿の回想録に関するもっとも体系的かつ緻密な研究は、アンドレ・ベルティエールの国家博士論文でも

ある前掲書 *Le cardinal de Retz mémorialiste* (註9) であらう。ベルティエールに対する評価は Marie-Thérèse Hipp, « Une nouvelle problématique sur les Mémoires :

*Le cardinal de Retz mémorialiste* par André Bertière », *XVII<sup>e</sup> siècle*, 124, 1979, pp. 219-233 を見よ。また、*Revue d'histoire littéraire de la France*, janvier-février 1989, 89<sup>e</sup> année, n°1 ではレ枢機卿の回想録の特集がまとめ、最近では *Littéraires classiques*, N°57, hiver 2006 が「Cardinal de Retz : Mémoire」と題して序文も含め二三の論文を載せている。邦語文献に関しては、文学研究の分野に以下の論文がある。伊東広太「レス枢機卿について—その『メモワール』の理解のために—」『文芸研究』(明治大学文芸研究会) 第四号、一九五六年、一二九—一四四頁。安藤昌一「レス枢機卿とその周辺」『人文論集』(早稲田大学法学会) 第三号、一九六六年、一一三—一三四頁。大島利治「レ枢機卿『回想録』の文学性」『共立女子大学文芸学部紀要』第三二集、一九八五年、一九—三二頁。坂本勲「第一次フロンドの乱(一) —『回想録』におけるレス枢機卿の証言—」『北九州大学文学部紀要(B系列)』第一八巻、一九八五年、八五—九三頁。内海利朗「レ枢機卿の『メモワール』を読む」『明治大学教養論集』二七二号、一九九五年、四一—一三三頁。

- (15) 註10参照。

- (16) Retz, *Mémoires*, p. 127.

- (17) Marie-Thérèse Hipp, *Mýthes et réalités. Enquête sur le roman et mémoires (1660-1700)*, Paris, 1976, p.27.
- (18) Reitz, *Mémoires*, p. 127.
- (19) A. Bertière, *op. cit.* シェンケル「部族」一章を引く。本編で使用している「トナイヤール」版の編者も「回想録の受け手としてこの書にこの種のものはヤン・ニェ夫人による」と語り、この説を大筋で受け入れている。Reitz, *Mémoires*, notice, p. 1209.
- (20) Hubert Carrier, « Sincérité et création littéraire dans les Mémoires du cardinal de Reiz », *XVII<sup>e</sup> siècle*, 94-95, 1971, pp. 39-74.
- (21) *Ibid.*
- (22) A. Bertière, *op. cit.*, pp. 268-269.
- (23) *Ibid.*, p. 306.
- (24) *Ibid.*, pp. 305-306.
- (25) *Ibid.*, p. 321.
- (26) 最近発表された論文Marc Hersant, « Viesse d'écriture et vérité aristocratique dans les *Mémoires* du cardinal de Reiz et dans les *Mémoires* du duc de Saint-Simon », *XVII<sup>e</sup> siècle*, n°231, 2006, pp. 199-216によれば、回想録における「真実」の問題が論じられる。回想録作者＝貴族の「真実」と「歴史」の「真実」との相違が指摘されている。しかし、回想録作者などとして貴族としての本質が「真実」であったとしても議論はやはり観念的である。回想録に含まれる嘘を史料として扱う扱いかどうも本編の関心には十分な答えを与えてはくれないうちに抑えられる。

- (27) カロル・キングスブルグ（上村法明訳）『歴史を再考する歴史』ちくま文庫、二〇〇三年、八五頁。
- (28) Reitz, *Mémoires*, p. 852.
- (29) *Journal des guerres civiles de Dubuisson-Aubeny, 1648-1652*, publié par Gustave Saige, vol. 2, Paris, H. Champion, 1885, pp. 246-251 ; *Registre de l'Hôtel de Ville de Paris*, éd. par Le Roux et Douët-d'Arceq, tome 3, Paris, 1848, pp. 51-75 ; « La journée du 4 juillet 1652 à l'Hôtel de Ville de Paris. Relation de Pierre Lallemand », éd. par E. Maugis, *Revue historique*, 133, janvier-avril 1920, pp. 55-72.
- (30) George Mongrédien, *Le Grand Condé*, Paris, 1959, pp. 109-127 ; Christian Jouhaud, « 4 juillet 1652 : l'incendie de l'Hôtel de Ville, à Paris », Jacques Julliard (dir.), *Les conflits*, dans André Burguière et Jacques Revel (dirs), *Histoire de la France*, Paris, 1990, pp. 40-41 ; Robert Descimon, « Autopsie du massacre de l'Hôtel de Ville (4 juillet 1652) : Paris et la Fronde des Princes », *Annales HSS*, 2, 1999, pp. 319-351.
- (31) だがこの結果はフランス国王の子爵が叛乱を起した結果としてたまたま、この事件の中、暴徒はフランス人の人物も殺害されたことからは免れなかった。Christian Jouhaud, « 4 juillet 1652 », p. 41.
- (32) *Mémoires de Valentin Comart, premier secrétaire perpétuel de l'Académie française*, éd. par Michaud et Poujoulat, Paris, 1838, p. 568.

- (32) Retz, *Mémoires*, p. 852.
- (33) *Mémoires de Valentin Comrart*, p. 568.
- (34) Nicolas Schapira, *Un professionnel des lettres au XVII<sup>e</sup> siècle. Valentin Comrart : une histoire sociale*, Seyssel, 2003, pp. 440-461, citation p. 445.
- (35) *Mémoires de Guy Joly*, éd. par Michaud et Poujoulat, Paris, 1854, p. 75.
- (36) *Suite véritable des intrigues de la paix*, dans *Œuvres du cardinal de Retz*, coll. « Grands Écrivains de la France », tome V, p. 420.
- (37) Carrier, « Sincérité et création littéraire », pp. 55-56 ; A. Bertière, *op. cit.*, p. 311 note 195.
- (38) 一六六〇年代初めから、ロニエ家の結婚葬祭の折々に、ノートルダム脚は親王の手紙を授けしむる。° *Œuvres du cardinal de Retz*, coll. « Grands Écrivains de la France », tome VIII, Paris, 1887, pp. 3\*-27\*.
- (39) Retz, *Mémoires*, pp. 286-292. 「肖像の回廊」に焦点を当てて分析した研究に、Pierre Babbah, *La Galerie des Illustres dans les Mémoires du Cardinal de Retz*, Saint-Etienne, 2000, 48頁。
- (40) Retz, *Mémoires*, p. 287.
- (41) *Ibid.*, p. 211.
- (42) *Ibid.*, p. 849.
- (43) エーリック・アウエルバッシン (篠田一士・川村二郎訳) 『「メーシス (上)」』筑摩書房 (ちくま学芸文庫) 一九九四年、
- (44) 四五一-四六頁。
- (45) フランス語には、「追悼演説のよびな體」を *menteur* comme une oraison funèbre」などの慣用句がある。° 坂井の追悼演説のよびな體 Paul Aron, Denis Saint-Jacques et Alain Viaia (dir.), *Le dictionnaire du littéraire*, Paris, 2002, pp. 425-426。Marie-Madeleine Fragonard のよびな體 \* oraison funèbre \* の語出を参照。
- (46) Bossuet, *Oraison funèbre du prince de Condé*, dans Bossuet, *raisons funèbres*, éd. par Jacques Truchet, Paris, coll. « folio classique », 1998, p. 373-374.
- (47) Christian Jouhaud, *Mazarinades : la Fronde des mois*, Paris, 1985, p. 94.
- (48) この日の出来事の記述はこうだが、ルイ・トリンが「このよびな體事な作也」(Ch. Jouhaud, *Mazarinades*, p. 263 note 3) を書した。° Louis Marin, *Le récit est un piège*, Paris, 1978, pp. 35-66. (鎌田博夫訳『語りつづる』法政大学出版局、一九九六年、四一-七六頁。)
- (49) Retz, *Mémoires*, p. 708.
- (50) *Ibid.*, pp. 708-709.
- (51) *Ibid.*, p. 709.
- (52) La Rochefoucauld, *Mémoires*, dans *Maximes Mémoires Œuvres d'après*, présenté par Alain Brunin, Paris, 1992, pp. 1006-1007.
- (53) *Mémoires de Madame de Motteville*, éds par Michaud et Poujoulat, Paris, 1854, p. 439.

(54) 「しかし、彼ら〔ロンデ親王の兵士〕がグレーヴ広場に集まってきたから長い時間が経っていた。広場に入ったのが午後一時、親王が〔市庁舎を〕出たのは、それから六時間以上後だった。それにひどい暑さで、喉の渇きをいやし、退屈を紛らすために、彼らは五〇ミユイ以上のワインを空け、酔っ払ってしまったのだ。」 *Mémoires de Valentin Corvart*, p. 568.

(55) A. Bertière, *op. cit.*, p. 151.

(56) Paul Benichou, *Morales du grand siècle*, Paris, coll. « folio essais », 1948, pp. 128-148 (朝倉剛・羽賀賢一訳「偉大な世紀のキブル」法政大学出版局、一九九三年)；Hubert Carrier, « Les derniers des héros : réflexions sur la permanence de l'idéal héroïque dans la génération de la Fronde », *Travaux de littérature*, n° 5, 1992, pp. 129-150. 枢機卿の英雄的キブルについて、A. Bertière, *op. cit.*, pp. 367-392を参照。

(57) Carrier, « Les derniers des héros », p. 144.

(58) Antoine Adam, *Histoire de la littérature française au XVII<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1954, pp. 375-379.

(59) たとえば、ポール・ヘニッシュューはこう指摘する。「現実はい出来事の細部として文学作品に働きかけるのではない。全般的雰囲気として現れるのである」。P. Benichou, *op. cit.*, p. 88 (邦訳八一頁)。ただし訳出は引用者による。同様の見解は、George Forestier, « Le théâtre dans la Fronde, la Fronde dans le théâtre : réalité historique et thématique littéraire », dans *La Fronde en questions*, éd. par Roger

Duchêne et Pierre Ronzeaud, Aix-en-Provence, 1989, pp. 231-243にも見られる。

(60) Reiz, *Mémoires*, p. 460. クリスチャン・シュオーによれば、血統親王 prince du sang たるロンデ親王は国王の代理人であり、国王が国家でもある王朝国家にあつては、彼もまた国家なのである。Christian Journaud, « Politiques de princes : les Comte (1630-1652) », dans *L'État et les Aristocrates (France, Angleterre, Ecosse) XII<sup>e</sup> - XVIII<sup>e</sup> siècles*, éd. par Philippe Contamine, Paris, 1989, pp. 335-355.

(61) Reiz, *Mémoires*, p. 454.

(62) レーズ侯 marquis de Laigue (一六〇四—一六七四)。オルレアン公ガストンの護衛隊長を務める。

(63) Reiz, *Mémoires*, p. 454.

(64) 「〔マザラン〕枢機卿は親王殿下を逮捕しようとした計画」の前に彼をフロンデ派と仲違ひさせようとした。…彼はセルヴァンに命じて親王に手紙を書かせ…朝の騒ぎは彼を亡き者にしようとするフロンデ派が仕組んだものだと伝えた。親王殿下はこの忠告の手紙を王妃とオルレアン公、そして枢機卿殿に見せた。誰よりも驚いて見えたのは枢機卿だった。…親王殿下の身体を危険に曝すようなことがないよう、あたかも彼が乗っているかのやうにして、馬車を送り返されることになった。…事は計画通り進んだ。すると見知らぬ男たちが馬車に近づき、「アンリ四世の」騎馬像の前で、マスケット銃を数発放った。…この



とき、枢機卿は悪のりした。…彼は親王殿下のどんな近親や友人よりも、深く心配して見せたのだ。…このようにして、親王殿下は自ら欺かれ、枢機卿の熱意を友情のしるしと受け取ってしまった。本当は隠された憎しみと、より巧妙に計画を実行しようとの願望の結果だったのに。」  
La Rochefoucauld, *op. cit.*, pp. 943-944.

しかし、ニコロシユフコーはこの「計画」をどうやって知ったのだろう。はつきりしているのは、彼が暗殺未遂事件と親王逮捕とが起こった後に、この記述を行ったことである。

(65) *Mémoires de Madame de Mottville*, p. 317.

(66) Paul Bénichou, *op. cit.*, p. 30 (邦訳二頁)。

(67) *Ibid.*, p. 82 (邦訳七四頁)。ただし訳出は引用者による。

(68) レ枢機卿の従姉妹レディギエール公妃アンヌAnne, duchesse de Lesdiguièreの息子フランソワ＝エマニュエル François-Ermanuelとその妻、レ枢機卿の葬儀を執り行った。

(69) *Œuvres du cardinal de Retz, tome VIII, correspondance du prince de Condé à Ricou*, p. 26\*.

(70) トマロフは二つの「真実」を以下のように区別する。曰く「この語〔真実〕については少なくとも二つの意味が区別されなければならない。真実―適合と真実―露呈である。前者は尺度として、すべてと無しかもたない。後者はより多いと少ないである。Xが犯罪を犯したことは、いかに情状酌

量の余地があるとしても、真実かいつわりかである。ユダヤ人がアウシュヴィッツの煙突から煙となって消えたか否かについても同様である。しかしながら、問題がナチズムの大義名分とか一九九一年の平均的フランス人のアイデンティティにおよぶならば、こういったぐあいの答えはまったく考えることができない。答えはより多い真実かより少ない真実しかふくむことができない。その答えが希求しているのは、ある現象の本性を露呈させることであって、事実を確定することではないからである。」〔Zvetan Todorov, *Les Morales de l'histoire*, Paris, coll. « Pluriel », 1991, pp. 167-168. (大谷尚文訳『歴史のモラル』法政大学出版局、一九九三年、一五一―一五二頁。引用に際し一部改変。)

〔付記〕

守山記生先生より賜った鴻恩と仁恵に感謝し、謹んで哀悼の気持ちを捧げます。